

王貫峠

大塚喜子

大矢太郎は東京から愛車のレガシーを飛ばして一年半ぶりに奥出雲町へ帰省した。正月はコロナ騒ぎで、母から「厄除けの札と餅と、のどぐろの干物」が届いたから、帰らなかつた。少し早い夏休みだ。

翌朝、幼友達の国夫の家へ向かった。国夫は玄関の前で待っていた。エクボが埋没して、まん丸の顔が更に丸くなり、二十八歳だというのに（オッサン）にみえる。

土曜、早朝、快晴。三拍子揃った今日は絶好の王貫越えになること間違いない。国道（432号線）を一時間ほど走っている。山々は晩春から初夏になり、スギや楓の緑が濃くなった。助手席の国夫が唐突に

「結婚しようと思ってる」

「えっ、今、何て言った？」

「おかしいかな。俺が結婚するなんて・・・」

「そんなことないよ。そんなことない・・・」

友達が結婚すると言っているのだ、カッコよく返事したいのに、気の利いた言葉が出てこない。カーブが続く上り坂に入ると、周辺の山々はそれ迄の緑に代わって、ヤマボウシの白い苞が目につく。喉が渴いて、口がパクパクする。話の接ぎ穂を見つけられないでいると、国夫も黙ってしまった。サービスイリアに入って身障者用の『p』に向かうと、ワゴン車がとまっている。空くのを待つしかない。売店の土産袋を下げた家族づれが、談笑しながら、戻ってきた。誰も車椅子や杖を使っていない。全員乗りこんだ後も発車する気配がない。儼然としていると「ワゴンが出るぞ！」と国夫に促された。

レガシーを定位置に駐車して、太郎は外に出て空を仰ぎながら背伸びした。国夫は太い首を後ろに捻って、後部座席の車椅子を取り出している。国夫が車椅子の生活になって初めてのドライブの時、太郎は当然のように乗り降りを手伝おうとした。

「生涯、こういう生活になる。自分で出来ることは自分でする」

「でも・・・」

「友達だと思ってくれるなら、ほっといてほしい。助けてもらいたいときは素直に頼むから」

「でも・・・」

「今まで通りに付き合ってくれよ」

「分かった・・・」

高校でラグビーをやっていた国夫の大きな身体でも、車椅子は重いはずだ。自分が一緒の時は手伝いたい。それこそ二人は友達なのだから。国夫の毅然とした振る舞いに、太郎は三度目の（でも・・・）を封印した。

五平餅や、イカを焼く香ばしい匂いに人が寄っている。「何か食う？」「いや！」というわけで、何も食わず、ガソリンも入れず、夫々がトイレに入っただけだった。国夫の結婚の話が引つかかってこうなってしまった。

相手はだれ？ 僕の知っている人？ 早く知りたい。でもイカや五平餅を焼く煙の中で話題にする気になれない。エンジンをかけると

「あれ？ 聴きたいね。」

「何回も聞かせたんだから曲名ぐらい覚えろよ！」 太郎は得意げに口をとんがらせた。

「覚えたよ。グリーグの？ えーと・・・ピアノコンチェルト・イ短調だったね」 言いながら、国夫は何本ものテープの中からその一本を選び出し、不器用にセツトした。

「ボリウム上げろよ。出だしがいいんだ」と太郎。

「OK」と答えながらステレオの調整に手間取っている。

暫く続いていたカーブが終わって、直線道路に入った。ヤマボウシに変わって、松や楓の緑が次々飛び込んでくる。

二人が息を潜めると・・・ティンパニーが一気に轟いた。一瞬の静寂の後、オーケストラはクレッシェンドで頂点まで高まり、フォルテッシモに上り詰めた。続いて、華麗なピアノが登場した。

「いきなりティンパニーから始まるのがいいよな。僕の知っている人？」 太郎はやっと切り出した。

「ウン・・・良子ちゃん」

「エッ・・・良子ちゃん、あのジャジャ馬の？」 太郎は思い切り国夫の方に首を捻って横顔をまじまじと見た。

まさか！ なんていうことだ！ ぼくが密かに思いを寄せている良子ちゃん！ 良

子ちゃんだって、僕に気があるんだ。良子ちゃんは僕が好きだ！良子ちゃんは僕のプロポーズを待っている。なのに・・・いつ、なぜ、どうして、どうやって？

「今の良子ちゃんはジャジャ馬じゃないヨ」国夫は前方を見つめたまま、静かにキツパリ言った。

「そうか。そういうことになっていたとは驚きだ」太郎は必死で、平静を装ってハンドルを握った。そうするしかないではないか。

太郎は良子にプロポーズしたいと思っている。受けてくれるだろうと思っっている。コロナ禍が終息したら、東京で所帯を持ちたいと思っっている。

冷静にハンドルを握り続ける自信がなくて、呆然としてしていると、前方に隊列を組んだハーレーダビッドソンが現れた。三十台はあろうか。ハンドルを握る中年の男たちは、全員がそろいの服に身をつつみ、誇らしげに、等間隔で走行している。太郎と国夫はこの勇敢な集団を、羨望をもって追い越した。バックミラーの中で一団は次第にレガシーと距離を離し、二人の溜息とともに消えた。オートバイ・ショウが幕を引くと

「彼らにグリーグはびつたりだったな・・・彼らの為にイ短調を伴奏してやっただんだネ」二人は領きながら十年前に想いを重ねた。

先頭を走っていた国夫の350CCのバイクが急カーブのガードレールに激突して空を舞った。高校二年生の夏だった。重傷を負った国夫と後続の我々三人は、あの瞬間にどう行動したか、記憶は未だに曖昧だ。病院に駆けつけた親たちは、余りの立場の違いに誰もが口を閉ざした。

中学時代の仲良し五人グループは密かにツーリングを企てた。途中で長井信夫が、酒乱の父親の借金が原因で大阪に転居した。長井は人望があり、勉学に優れ、グループのまとめ役だった。残った四人は神社で悶々と時を過ごしたが、十七歳の知恵を持ち寄っても結論は出ず、計画は中断された。

夏になり、話は一気に再燃した。ならば、親に許可を得てから、堂々と行くという事になって、夫々は勉学に励みながら、綿密な計画書を作り上げた。

太郎は両親の前に、恐る恐る、しかし、堂々と説明した。こまごまと質問された挙句に、反対される事は充分ある。(仲間が一人でも抜けたら、計画は中止する)と決めていた。自分は、その一人になりたくなかった。

太郎は握った拳を膝に置いたまま、親の言葉を待った。父親の目じりの皺が動いた。口を開くのは親父が先か、おふくろが先か、緊張は高まった。

「事故だけは起こすなよ」と親父

「充分気をつけてね」とおふくろ。呆気なかった。拍子抜けした。耳を疑った。こんなにすんなり許しが出ると思っていなかった。奥歯を噛みしめて、拳を握り、ニンマリしたいのを必死で我慢した。

何のことはない。四人の計画を知った親たちが、互いに連絡し合っていたと知った。

太郎と仲間三人は、入院が長引く国夫をたびたび病室に見舞った。休日は大阪の量販店で働いている長井信夫や中学二年の時に松江から転校してきた良子も加わった。

良子は大柄で威勢が良く、成績はさほどでないが、と言うより、下位だったが、やたら正義感が強く、お節介で騒がしかった。太郎の縮れ毛を女みたいだと揶揄し、国夫のエクボを可愛いと冷やかした。カップ・ラーメンをすすりながら、トランプに興じながら、皆で何を話したのか、今となっては想い出せない。そんなある日、良子が（ミー）と名付けて可愛がっていた猫の行方がわからなくなり、騒ぎになった。病棟の外の籠の中に居るはずのミーが見当たらなくなったのだ。良子は猫が潜り込みそうなところを黙々と探し続けた。一抜け二抜け帰る友達に良子が「ありがとう」としおらしく頭を下げる様子を見て、太郎は引き下がれなくなった。

食品会社の倉庫の外階段の下にうずくまっているミーを見つけたのは太郎だった。

良子は無言で太郎を見つめ、涙をためて頭を下げた。そして、ミーを抱いたまま、背伸びして、目を瞑って唇を重ねてきた。良子の涙が太郎の首筋を濡らし、太郎は階段の手摺を握ったまま棒立ちになった。ミーに頬ずりをしながら帰っていく良子の姿を見ながら、自分はミーのためでなく、良子のためにミーを探し続けたのだと気がついた。

第二楽章のアダージョからそのまま切れ目なく第三楽章に入ると、国夫はボリウムを落として静かに語りだした。

「良子ちゃん、俺との結婚を親に強烈に反対された」

「それを押して結婚にまで漕ぎつけるなんて、凄じくないか。目出度いじゃないか。祝福するよ。でも、良子ちゃんのこと、今までおくびにもださなかつ

たね」たじろぐ太郎の声は上ずった。

「いろいろありすぎるほど、あつたき。とても口に出して説明できなかった」しんみり話す国夫の横顔を、太郎はハンドルを握りながら何度も見た。

太郎はその頃、自分の事だけで精一杯だった。上京して、大学を卒業して東京に本社があるゼネコンに就職した。良子とは年賀ハガキの交換ぐらいで、具体的に自身の結婚を考える余裕はなかった。まして、国夫が高校を卒業して福祉施設の事務員として今の生活を確立するまでに、如何に工夫と努力を重ねてきたか友達として知る部分も少ない。

トラックが幌をハタハタさせながら、レガシーを追い越していった。

「四年前になるけれど、当時の僕は最高に落ち込んでいた。手術に次ぐ手術を受けても症状は相変わらずで、医者に（ここまです）と言われてからはリハビリに励めなくなった」

「そうだよな」

「来る日も来る日もリハビリばかりで辛かった。周囲や、特に親に当たってしまった。枕や本など投げつけたり、声を荒げたりして・・・」

長井は日曜日なると見舞いに来た。来れば聖書のコリント人への手紙第十章十三節を指して

【神は真実な方ですから、あなたがたを耐えられないほどの試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます】

と言う。長井は親の酒乱で苦勞してきたから、彼の話すことに説得力がある・・・辛いリハビリに耐えられないのは自分が悪いと考えると、神の言葉に素直になれなかった。農協に勤める良子ちゃんは何時も何も言わないで、部屋の隅の椅子に座って一緒に長井の聖書の話聞いてくれた。長井が帰った後も一緒にテレビを見たり、マンガ本をよんだり・・・一時間も二時間もダ

「良子ちゃんが国夫の思いを共有してくれたのか？」

「その時は判らなかったが・・・そうだった。」

自分に向けられたあの良子の唇や瞳や涙は、太郎の知らない間に国夫にむけられていたのだ・・・太郎はアクセルを踏み込んだ。メーターは120キロを超え、さらに加速した。

「テープを変えろ」太郎に言われて国夫が箱をかき回しながら手間取っている

と・・・再びグリーグのイ短調・第一楽章のティンパニーが轟いた。続いてピ
アノが華麗に登場すると、その旋律に吸い込まれるように、レガシーのスピー
ドは収まった。

「良子ちゃんと幸せになれよ。じゃじゃ馬とうまくやれよ。越えられない試練
はない・・・長井の言う通りだ。おめでとう」

おわり

4433 字